第14章　本支店会計

14－1　本支店間取引

【重要性：A】

ＰＯＩＮＴ！

①　本支店会計がどのようなものかを理解しよう！

②　本支店間取引について仕訳を行えるようにしよう！

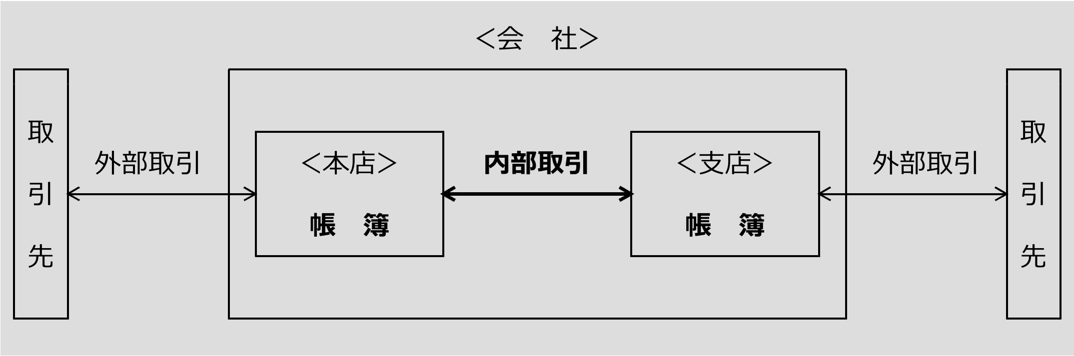
主な勘定科目

「本店」勘定

「支店」勘定

（１）本支店会計とは？

会社の販売先が拡大すると、本店だけでは対応できなくなり、各地に支店を設けるようになります。そうすると、本店と支店の取引や支店同士の取引が生じますので、これらの取引を処理する会計制度が必要となります。さらには、支店の業績を評価したり、本店と支店を合わせた会社全体の経営成績や財政状態を明らかにする会計制度が必要となります。これらに対応した会計制度が**本支店会計**です。なお、本章においては株式会社を前提としています。

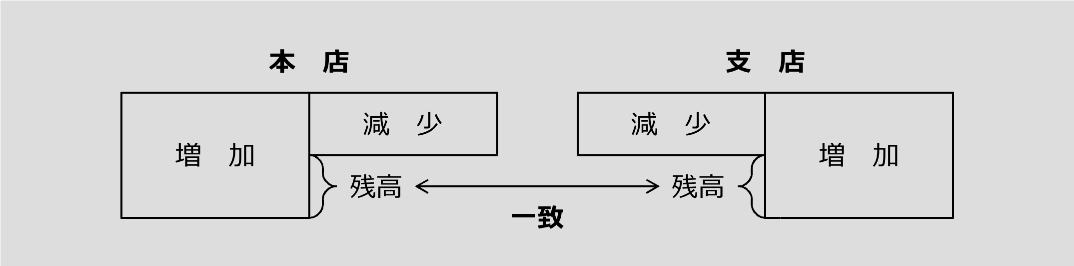


外部取引は今までの簿記と変わりませんので、新しく学習するのは会社の内部取引である**本支店間取引**になります。

（２）本店勘定・支店勘定

本支店間取引は会社内部の取引であり、会社内部の債権・債務の勘定として、本店では「**支店**」勘定、支店では「**本店**」勘定で処理します。また、支店が２つ以上ある場合にはそれぞれの支店名を付けた支店勘定を用います（例　「北海道支店」勘定、「沖縄支店」勘定)。「本店」勘定と「支店」勘定は対応する一対の勘定ですので「**照合勘定**（しょうごうかんじょう）」といいます。

「本店」勘定と「支店」勘定は会社内部の債権・債務を表しますので、貸借反対に発生し、その残高は貸借反対側で必ず一致します。



（３）本支店間取引（商品売買以外）

支店間取引においては、先に現金や売掛金等の勘定について借方か貸方かを決定し、その相手勘定科目を照合勘定である「本店」勘定や「支店」勘定で処理するという手順で仕訳を行って下さい。

例題14－１　**本店は支店に現金10,000円を送付した。**

・本店

本店の現金が減少したので、貸方は「現金」勘定とし、相手勘定科目の借方は「支店」勘定で処理します。

借方科目	金額	貸方科目	金額
支店	**10,000**	**現金**	**10,000**

・支店

支店の現金が増加したので、借方は「現金」勘定とし、相手勘定科目の貸方は「本店」勘定で処理します。

借方科目	金額	貸方科目	金額
現金	**10,000**	**本店**	**10,000**

例題14－２　**本店が支店の売掛金800円を現金で回収した。**

・本店

本店の現金が増加したので、借方は「現金」勘定とし、相手勘定科目の貸方は「支店」勘定で処理します。

借方科目	金額	貸方科目	金額
現金	**800**	**支店**	**800**

・支店

支店の売掛金が減少したので、貸方は「売掛金」勘定とし、相手勘定科目の借方は「本店」勘定で処理します。

借方科目	金額	貸方科目	金額
本店	**800**	**売掛金**	**800**

例題14－３　**支店が本店の買掛金500円を現金で支払った。**

・本店

本店の買掛金が減少したので、借方は「買掛金」勘定とし、相手勘定科目の貸方は「支店」勘定で処理します。

借 方 科 目	金　額	貸 方 科 目	金　額
買　掛　金	**500**	**支　　店**	**500**

・支店

支店の現金が減少したので、貸方は「現金」勘定とし、相手勘定科目の借方は「本店」勘定で処理します。

借 方 科 目	金　額	貸 方 科 目	金　額
本　　店	**500**	**現　　金**	**500**

例題14－４　**本店は支店の雑費300円を現金で支払った。**

・本店

本店の現金が減少したので、貸方は「現金」勘定とし、相手勘定科目の借方は「支店」勘定で処理します。

借 方 科 目	金　額	貸 方 科 目	金　額
支　　店	**300**	**現　　金**	**300**

・支店

支店の雑費（費用）が増加したので、借方は「雑費」勘定（費用）とし、相手勘定科目の貸方は「本店」勘定で処理します。

借 方 科 目	金　額	貸 方 科 目	金　額
雑　　費	**300**	**本　　店**	**300**

例題14－5　**支店は本店が受け取るべき手数料400円を現金で受け取った。**

・本店

本店の受取手数料（収益）が増加したので、貸方は「受取手数料」勘定（収益）とし、相手勘定科目の借方は「支店」勘定で処理します。

借方科目	金額	貸方科目	金額
支店	**400**	**受取手数料**	**400**

・支店

支店の現金が増加したので、借方は「現金」勘定とし、相手勘定科目の貸方は「本店」勘定で処理します。

借方科目	金額	貸方科目	金額
現金	**400**	**本店**	**400**

例題14－6　**支店は支店の買掛金1,000円を支払うために、本店を名宛人、支店の仕入先A社を受取人として為替手形を振り出した。**

・本店

本店は為替手形の支払人となりますので支払手形の増加として、貸方は「支払手形」勘定とし、相手勘定科目の借方は「支店」勘定で処理します。

借方科目	金額	貸方科目	金額
支店	**1,000**	**支払手形**	**1,000**

・支店

支店の買掛金が減少したので、借方は「買掛金」勘定とし、相手勘定科目の貸方は「本店」勘定で処理します。

借方科目	金額	貸方科目	金額
買掛金	**1,000**	**本店**	**1,000**

例題14－7　本店の支払家賃2,000円のうち700円は支店負担分であるので、支店に負担させる。

・本店

家賃支払時に以下の仕訳を行っています。

借方科目	金　額	貸方科目	金　額
支　払　家　賃	2,000	現　　　　金	2,000

支払家賃の一部を支店に負担させることによって、本店の支払家賃（費用）が減少しますので、貸方は「支払家賃」勘定（費用）とし、相手勘定科目の借方は「支店」勘定で処理します。

借方科目	金　額	貸方科目	金　額
支　　　　店	**700**	**支　払　家　賃**	**700**

支店に負担させる仕訳を行った結果、本店で計上する支払家賃1,300円は本店負担分として正しい金額となります。

・支店

支店の支払家賃（費用）が増加したので、借方は「支払家賃」勘定（費用）とし、相手勘定科目の貸方は「本店」勘定で処理します。

借方科目	金　額	貸方科目	金　額
支　払　家　賃	**700**	**本　　　　店**	**700**

例題14－1 から **例題14－7** の取引に関する「本店」勘定と「支店」勘定の記入は以下となります。

<本店の帳簿>

支　店

10,000	800
300	500
400	
1,000	
700	

<支店の帳簿>

本　店

800	10,000
500	300
	400
	1,000
	700

残高11,100 ←→ 残高11,100

一致

（４）本支店間取引（商品売買）

本店が仕入れた商品を支店に送付したり、支店が仕入れた商品を本店に送付したりする場合、送付側では「仕入」勘定の減少として、受取側では「仕入」勘定で処理します。なお、会社内部の取引なので、債権債務は「本店」勘定・「支店」勘定で処理します。

例題14－８　**本店は支店へ商品（原価1,000円）を送付した。**

・本店

外部から仕入れた時に以下の仕訳を行っています（現金取引を仮定しています）。

借方科目	金　額	貸方科目	金　額
仕　入	1,000	現　金	1,000

当該商品を支店へ送付したので、本店では仕入がなかったこととするため、貸方は「仕入」勘定とし、相手勘定科目の借方は「支店」勘定で処理します。

借方科目	金　額	貸方科目	金　額
支　店	**1,000**	**仕　入**	**1,000**

・支店

本店から商品の送付を受けたので借方は「仕入」勘定とし、相手勘定科目の貸方は「本店」勘定で処理します。

借方科目	金　額	貸方科目	金　額
仕　入	**1,000**	**本　店**	**1,000**

例題14－９　支店は本店へ商品（原価700円）を送付した。

・本店

支店から商品の送付を受けたので借方は「仕入」勘定とし、相手勘定科目の貸方は「支店」勘定で処理します。

借方科目	金額	貸方科目	金額
仕入	**700**	**支店**	**700**

・支店

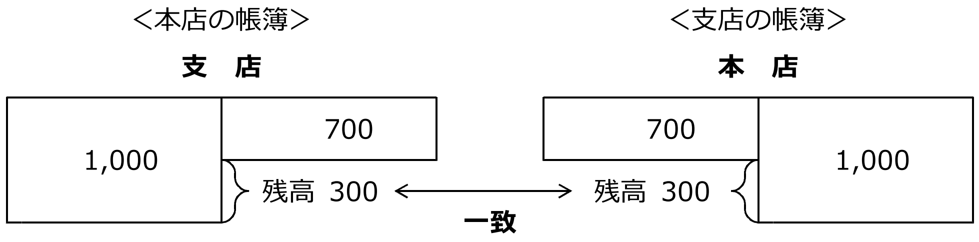
外部から仕入れた時に以下の仕訳を行っています（現金取引を仮定しています）。

借方科目	金額	貸方科目	金額
仕入	700	現金	700

当該商品を本店へ送付したので、支店では仕入がなかったこととするため、貸方は「仕入」勘定とし、相手勘定科目の借方は「本店」勘定で処理します。

借方科目	金額	貸方科目	金額
本店	**700**	**仕入**	**700**

上記の取引に関する照合勘定の記入は以下となります。



14－２　未達取引

【重要性：A】

ＰＯＩＮＴ！

①　未達取引がどのようなものかを理解しよう！

②　未達取引について仕訳を行えるようにしよう！

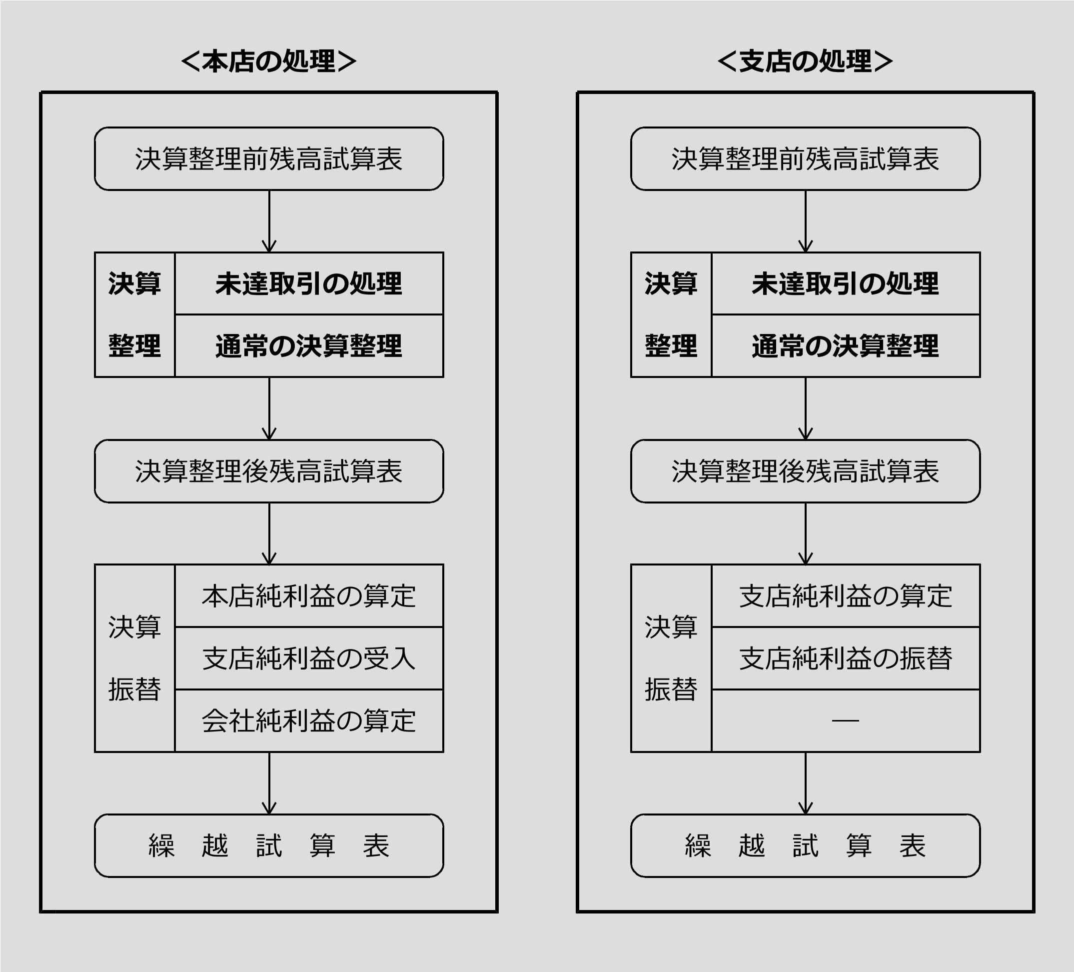
主な勘定科目

「本店」勘定

「支店」勘定

（１）決算手続

本店と支店それぞれに決算を行い、業績の報告を行います。帳簿で行う決算手続の流れを以下に示します。ここでは**決算整理**について学習します。



（2）未達取引

本支店間取引において、取引を行った側が処理を行ったとしても、相手側で商品が届いていなかったり、取引の通知が届いていないこと等を原因として処理を行っていないことがあります。このように一方が処理済みですが、相手側が処理を行っていない取引を**未達取引**（みたつとりひき）といいます。

未達取引は期中取引の未処理ですので、処理を行っていない側で決算整理において未達取引が届いたものとして処理を行います。

未達取引がある場合には、未達取引の分だけ決算整理前残高試算表における照合勘定は一致しませんが、決算整理で正しく処理されると、決算整理後残高試算表における照合勘定は一致します。

なお、本支店会計の決算整理には、「未達取引の処理」と貸倒引当金の設定等の「通常の決算整理」がありますが、先に未達取引の処理を行って、その後に通常の決算整理を行って下さい。

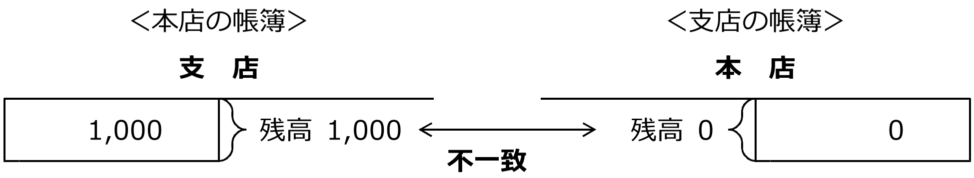
例題14－10　**本店は支店へ商品1,000円（原価）を送付したが、決算日現在、支店に未達であった。**

①　期中仕訳

・本店

借 方 科 目	金　　額	貸 方 科 目	金　　額
支　　　　店	1,000	仕　　　　入	1,000

・支店　仕訳なし

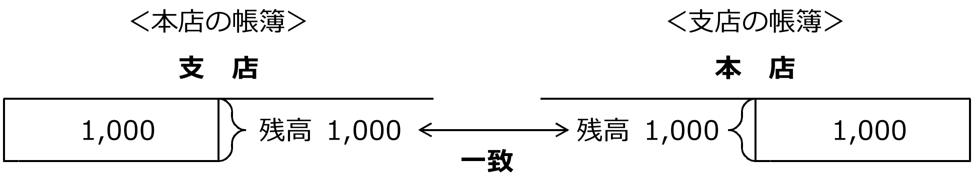


②　決算整理仕訳（未達取引の処理）

・本店　仕訳なし

・支店

借 方 科 目	金　　額	貸 方 科 目	金　　額
仕　　　　入	**1,000**	**本　　　　店**	**1,000**



例題14－11　**以下の未達取引に関して仕訳を行いなさい。**

①　本店は支店へ商品1,000円（原価）を送付したが、支店に未達であった。

②　本店は支店に現金10,000円を送付したが、支店に未達であった。

③　支店が本店の買掛金500円を現金で支払ったが、本店に未達であった。

1)　決算整理前残高試算表（一部）

決算整理前残高試算表

借方科目	本　店	支　店	貸方科目	本　店	支　店
支　　　店	30,500	―	本　　　店	―	19,000

2)　決算整理仕訳

・本店

	借 方 科 目	金　　額	貸 方 科 目	金　　額
③	**買　　掛　　金**	**500**	**支　　　店**	**500**

・支店

	借 方 科 目	金　　額	貸 方 科 目	金　　額
①	**仕　　　入**	**1,000**	**本　　　店**	**1,000**
②	**現　　　金**	**10,000**	**本　　　店**	**10,000**

3)　決算整理後残高試算表（一部）

決算整理後残高試算表

借方科目	本　店	支　店	貸方科目	本　店	支　店
支　　　店	30,000	―	本　　　店	―	30,000